福岡市埋蔵文化調査報告書第691集

野方久保遺跡

2001

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化調査報告書第691集

野方久保遺跡

2001
福岡市教育委員会

A区全景（北から）

序

玄海灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と数多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな環境を作り出しています。私たちはこの環境を後世に引き継ぐことを目標としたまちづくりを行っています。

その一方で本市では都市基盤整備事業等の事業を行い、活力のある都市の建設をおこなっていますが、そのために一部の遺跡が影響をうけるのもまた事実です。福岡市教育委員会ではこれらの遺跡についてはあらかじめ事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努力しています。

本書は西区野方一丁目地内における道路拡張工事にともなう発掘調査の成果を報告するものです。これらの調査によってこれまでの発掘調査に加えてこの地域での弥生時代から古墳時代、中世における歴史を説くための貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られるとともに、学術研究資料の一環としてご活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、事前協議、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力をいただいた土木局、壱岐団地自治会、地元の関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　言

1. 本書は市道拾六町西入部線の改良工事に先立って、福岡市教育委員会が平成11年4月13日から同年5月24日にかけて行った野方久保遺跡第5次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宜が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は大塚が行った。
4. 本書に掲載した写真の撮影は大塚が行った。
5. 本書に掲載した挿図の製図は大塚が行った。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21′西傾する。
7. 本書で使用した遺構の呼称は、竪穴住居をSC、土坑をSK、溝をSDと略号化している。
8. 遺構、遺物番号は基本的に通し番号としているが、一部欠番が生じる。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は大塚紀宜が行った。

本文目次

第1章 はじめに……1
1. 調査に至る経過……1
2. 調査組織……1
第2章 遺跡の位置と環境……2
第3章 野方久保遺跡第5次調査の記録……4
1. 調査概要……4
2. A区の調査……4
(1)A区概要……4
(2)検出遺構……4
1)住居址……4
2)土坑……8
3)溝状遺構……10
3. B区の調査……10
(1)B区概要……10
(2)検出遺構……12
1)土坑……12
2)溝状遺構……13
4. 包含層出土遺物……14
5. 試掘調査出土遺物……14
第4章 総括……14

挿図目次

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Fig.2　調査区位置図（1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
Fig.3　遺構配置図（1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
Fig.4　竪穴住居・土坑実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
Fig.5　遺構出土遺物実測図1（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Fig.6　遺構出土遺物実測図2（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Fig.7　包含層出土遺物実測図1（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
Fig.8　包含層出土遺物実測図2（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig.9　試掘調査出土遺物実測図(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

図版目次

巻頭図版　Ａ区全景（南から）
図版1　１ Ａ区全景（東から）
　　２ Ｂ区全景（東から）
　　３ ＳＤ－０３（西から）
図版2　１ ＳＫ－０５（東から）
　　２ ＳＫ－０６（南から）
　　３ ＳＣ－０８　土器出土状況（東から）
図版3　１ ＳＤ－３０（東から）
　　２ 包含層下掘下げ状況（南から）
　　３ R-1002 出土状況（東から）
図版4　出土遺物

第一章　はじめに

1. 調査に至る経過

平成10年（1998年）11月30日、福岡市土木局建設部西部建設第2課より、福岡市西区野方1丁目地内における市道拾六町西入部線の新設工事にともなう埋蔵文化財事前調査依頼が同市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。

これをうけて埋蔵文化財課では当該事業地が野方久保遺跡の隣接地にあたり、遺跡が存在する可能性があることを考慮して、事業対象地内を対象として平成11年3月に試掘調査を行った。試掘調査の結果、事業対象地の数地点で遺構、遺物を確認し、工事着手前に本調査が必要との見解が出された。

その後両者の協議により、遺構が確認された部分について発掘調査を実施することとなった。本調査は野方久保遺跡第5次調査として平成11年4月13日から同年5月24日まで実施された。

なお、一連の埋蔵文化財発掘調査の実施、及びその後の整理作業と本書の刊行に際しては、多数の作業員、及び農業土木課、さらに地元の方々の多大な協力を得ることができました。心から御礼申し上げます。

2. 調査組織

調査委託	福岡市土木局建設部西部建設第2課	
調査主体	福岡市教育委員会　教育長	西憲一郎（前）　生田征生（現）
調査総括	文化財部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	埋蔵文化財課調査第一係長	山口譲治
調査庶務	文化財整備課	宮川英彦
事前審査	埋蔵文化財課	田中寿夫　杉山富雄　宮井善朗　中村啓太郎
調査担当	埋蔵文化財課	大塚紀宜
調査作業	阿比留　治　井上　八郎　井上ヒデ子　坂本　隆二　城　容子	
	橘　良平　中村　文雄　楢崎　耕助　林　末孝　林　チセ子	
	平野　義光　古庄　孝子　矢野　和江	
整理作業	樋口　勝子　樋口　三恵子	

第2章　遺跡の立地と環境

室見川西岸の地勢　早良平野の中央部を南北に流れる室見川を中心とした地域を通常「早良地域」と呼ぶことが多い。早良平野の西側は背振山系から北に派生し、飯盛山、叶岳、長垂山と続いて今津湾に達する山系を境界とし、東側は油山から七隈、飯倉、荒江を抜ける舌状丘陵によって区画されている。このうち平野西側については、室見川とは別の水系である名柄川、十郎川が室見川と平行して北に流れており、この流域の遺跡はこの両河川間の微高地に立地することが多く、また山裾では飯盛山から派生する舌状丘陵や扇状地上に遺跡が立地している。野方久保遺跡もこのような丘陵上に位置する遺跡のひとつである。

名柄川・十郎川流域の諸遺跡

野方中原遺跡　弥生時代後期～古墳時代の大規模な集落、墓地が確認される。弥生時代後期の集落は環濠をもち、また古墳時代の100軒超の住居址と後漢鏡等の副葬品をもつ石棺墓が検出される。昭和51年に国史跡として指定される。

湯納遺跡(*1)　弥生時代後期?古墳時代前期の集落跡で、遺構内から多量の木製品が出土している。

宮の前遺跡(*2)　弥生時代後期から古墳時代初頭の墳墓群で、多量の副葬品が出土する。

拾六町ツイジ遺跡(*3)　弥生時代前期初頭～中世の水田遺跡。大量の木製品をはじめとする遺物が出土する。

十郎川遺跡(*4)　縄文時代晩期の包含層、中世の水田・集落跡が検出されている。

この他にも多数の遺跡が存在し、また有田遺跡群、吉武遺跡群とも近接しており、この地域一帯が遺跡の内容、密度ともに高いことが伺われる。

野方久保遺跡のこれまでの調査結果

野方久保遺跡では1983年の第1次調査以来これまでに4次の発掘調査を行っており、その報告から遺跡の概要が明かとなっている。

第1次調査(*5)　調査区は2地点に離れる。A地点は丘陵尾根部に位置し、古墳1基、竪穴住居群、掘立柱建物、溝状遺構が検出されている。B地点は谷部分に位置し、古代の水田、古墳時代初頭の竪穴住居址・掘立柱建物・井戸、弥生後期の竪穴住居・掘立柱建物などが検出される。弥生後期末の甕棺墓が1基出土している。

第2次調査　段丘北側に位置し、弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓、古墳時代の集落を検出する。中期前半の甕棺内から細形銅剣と把頭飾、中期中頃の甕棺内からヒスイ製勾玉、鉄鏃が出土している。調査区北側では段落ちとなり、弥生前期末～中期前半の遺物を含む。

第3次調査(*6)　丘陵西側に位置し、古墳時代後期以降の溝、古墳時代後期～中世の集落を検出する。

第4次調査(*7)　丘陵西端の十郎川沿いに位置する。弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居址や土坑、溝を検出している。

*1『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集』福岡県教育委員会　1976

*2『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集』福岡県教育委員会　1970

*3『拾六町ツイジ遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集　1983

*4『十郎川遺跡』日本住宅公団　1982

*5『野方久保遺跡(監)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第348集　1993

*6『野方久保遺跡(特)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第300集　1992

*7『野方久保遺跡3－第4次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第438集　1995

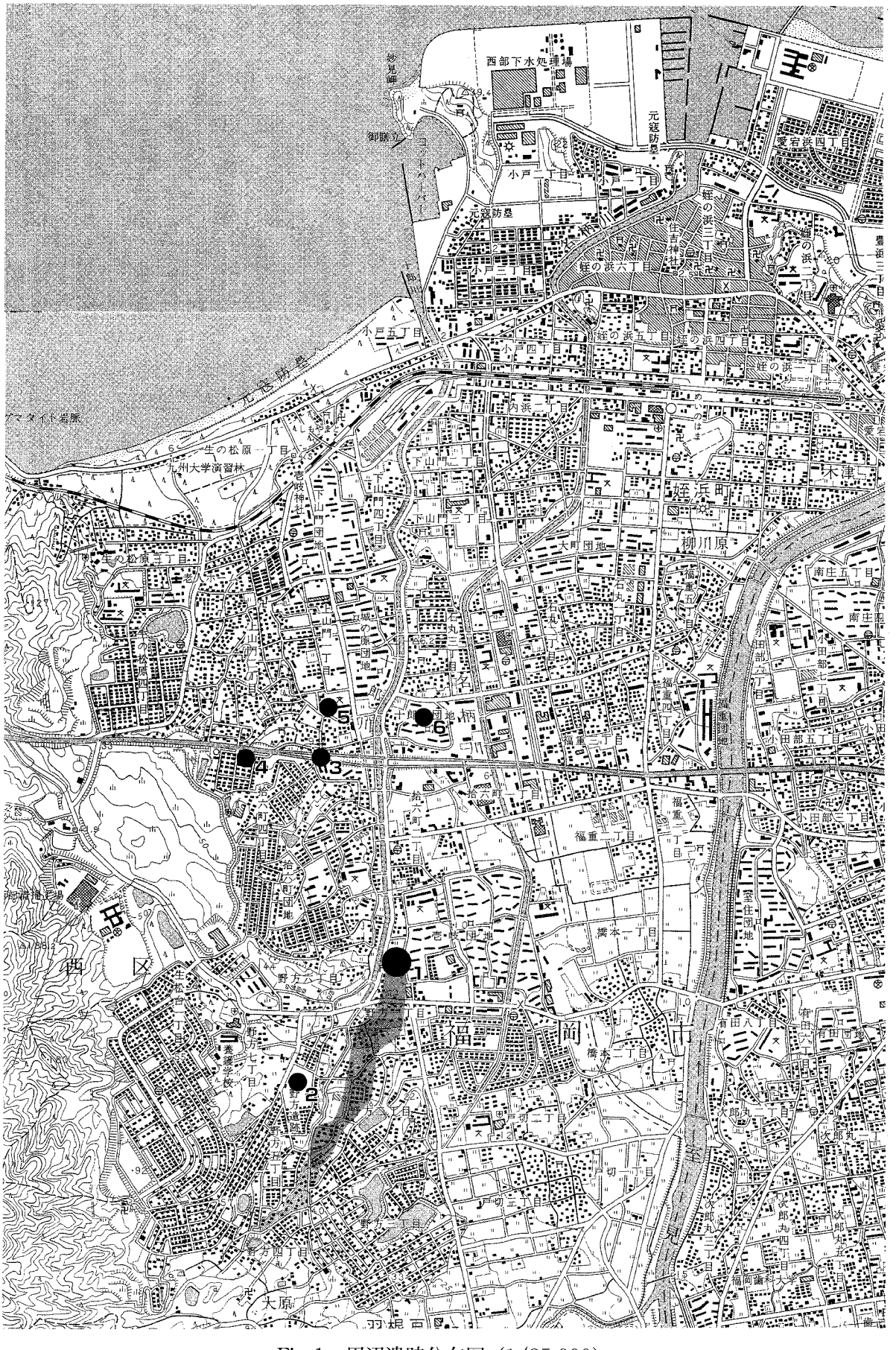


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1.野方久保遺跡第5次調査地点　2.野方中原遺跡　3.湯納遺跡
4.宮の前遺跡　5.拾六町ツイジ遺跡　6.十郎川遺跡（石丸古川B遺跡）

第3章　野方久保遺跡第5次調査の記録

1. 調査概要

野方久保遺跡第5次調査は調査対象地が水田・畑地であったため、水路や畦畔によって調査区が南北2箇所に分断されている。調査時に北側をＡ区、南側をＢ区と呼称して調査を行っており、報告書内でもこの呼称を用いることとする。調査工程は、まずＡ区を先行して調査し、Ａ区部分を工事側に引き渡した後にＢ区の調査を行った。調査期間はＡ区が平成11年4月13日から5月1日まで、Ｂ区が5月6日から5月24日までである。

調査時の遺構の番号はＡＢ両区で通し番号を付けている。遺物番号も同様にＡＢ両区の区別なく設定している。

2. Ａ区の調査

(1)Ａ区概要

Ａ区部分は調査区の北半分にあたる。現況は水田で、南側よりも一段低くなり、また蓮畑として利用されることもあって、保水性の高い地盤が堆積していることが調査前から予想された。調査面積は76.5㎡である。

基本層序は現地表面から耕作土、暗黒褐色粘土、暗黒色粘土、灰色粗砂層、黒色粘土となる。このうち暗黒褐色粘土、暗黒色粘土層、灰色粗砂層の各層が遺物包含層にあたり、黒色粘土層は無遺物層である。また調査区南側では黄白色～灰白色粘質シルト層が堆積しており、この層の上面が地山層になる。

遺構面は調査区北側では暗黒色粘土層上面と灰色砂質土層上面で検出する。調査区南側では先述した黄白色～灰白色粘質シルト層上面で遺構を検出する。遺構面のレベルは北側上面と南側のレベルでほぼ同じ高さになる。遺構面下層は層の堆積が複雑になり、堆積状況から見て水成堆積の様相を呈している。土質もシルト、砂層が主となり、最下層には粗砂層が堆積する。これらのシルト層、砂層も遺物包含層で、土師器、弥生土器を確認している。

A区で検出された遺構は住居址、土坑、溝で、A区全体にわたって広がる。ただしA区北側で検出された遺構群については検出が困難で、不明瞭な遺構が多く、形状の不安定なものも含まれる。南側では地山が安定し、密度の高い遺構群を検出したが大部分が柱穴で、調査区幅が3m前後ということもあって、建物の構成配置が明確なものはない。柱穴の直径は比較的大きなものが多く、規模の大きな建物が建っていた可能性がある。

遺構面下の包含層は、土層堆積状況から自然流路による数次の堆積によって形成されたものと見られる。大きく上下2層に分けることができ、上部の層群はシルト質を主体とし、弥生中期、古墳時代の土器を含む。下部の層群は粗砂を主とし、土師器を多量に含む層で、弥生土器は全く含まれない。この状況から、堆積過程において、各遺物の埋没状況も考える必要があろう。なお、この包含層からの出土遺物は節をかえて述べる。

(2)検出遺構

1)住居址

SC-01　Ａ区中央部上面で検出した遺構で、西側半分は調査区外に及び、調査区内では遺構のごく一部しか検出していない。検出した部分の形状から住居址の一部分であろうと推測する。主軸をほぼ南北にとる方形の竪穴住居とみられる。南北方向の全長は1.4m、東西方向全長は不明である。遺存部

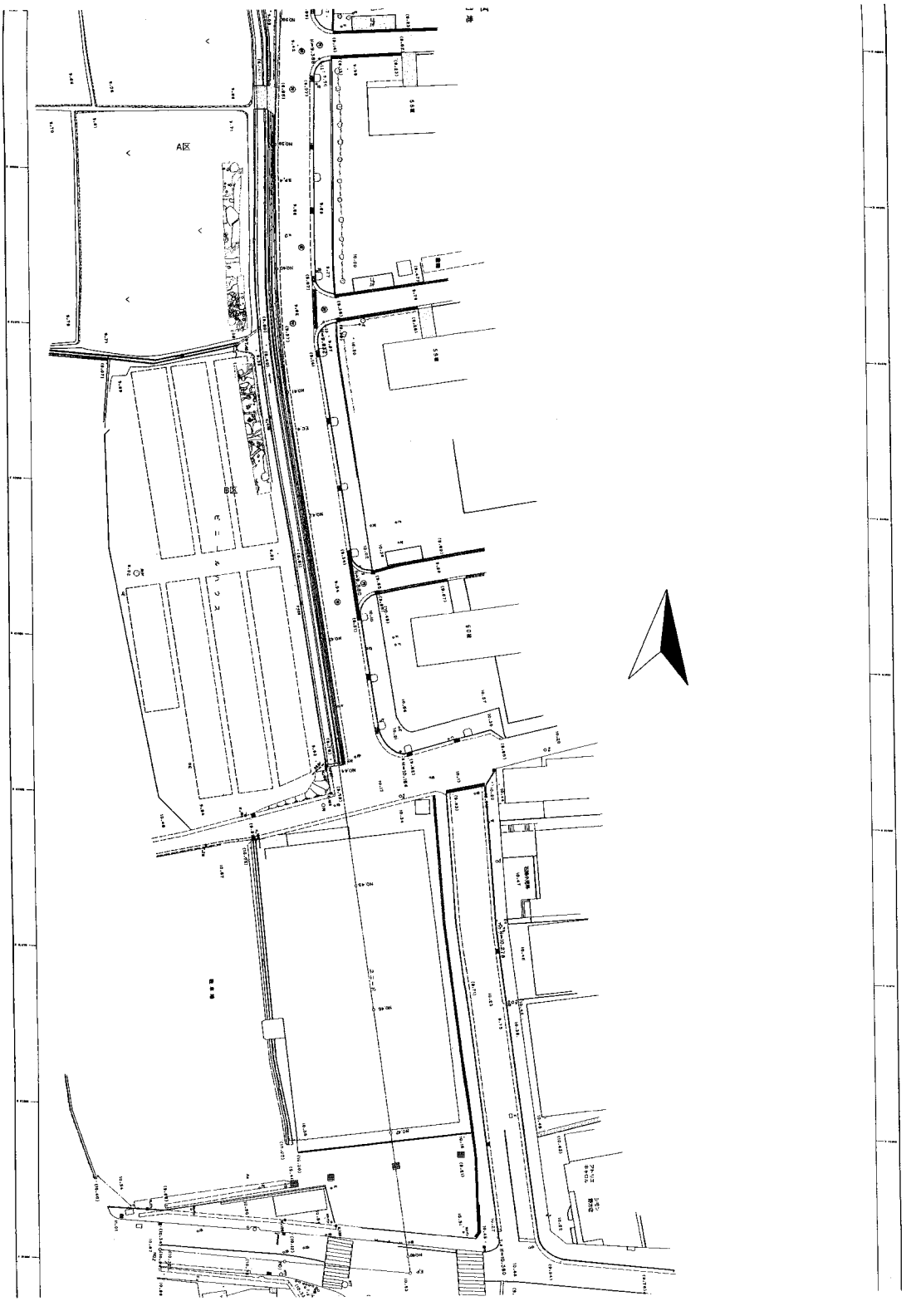


Fig.2　調査区位置図（1/500）

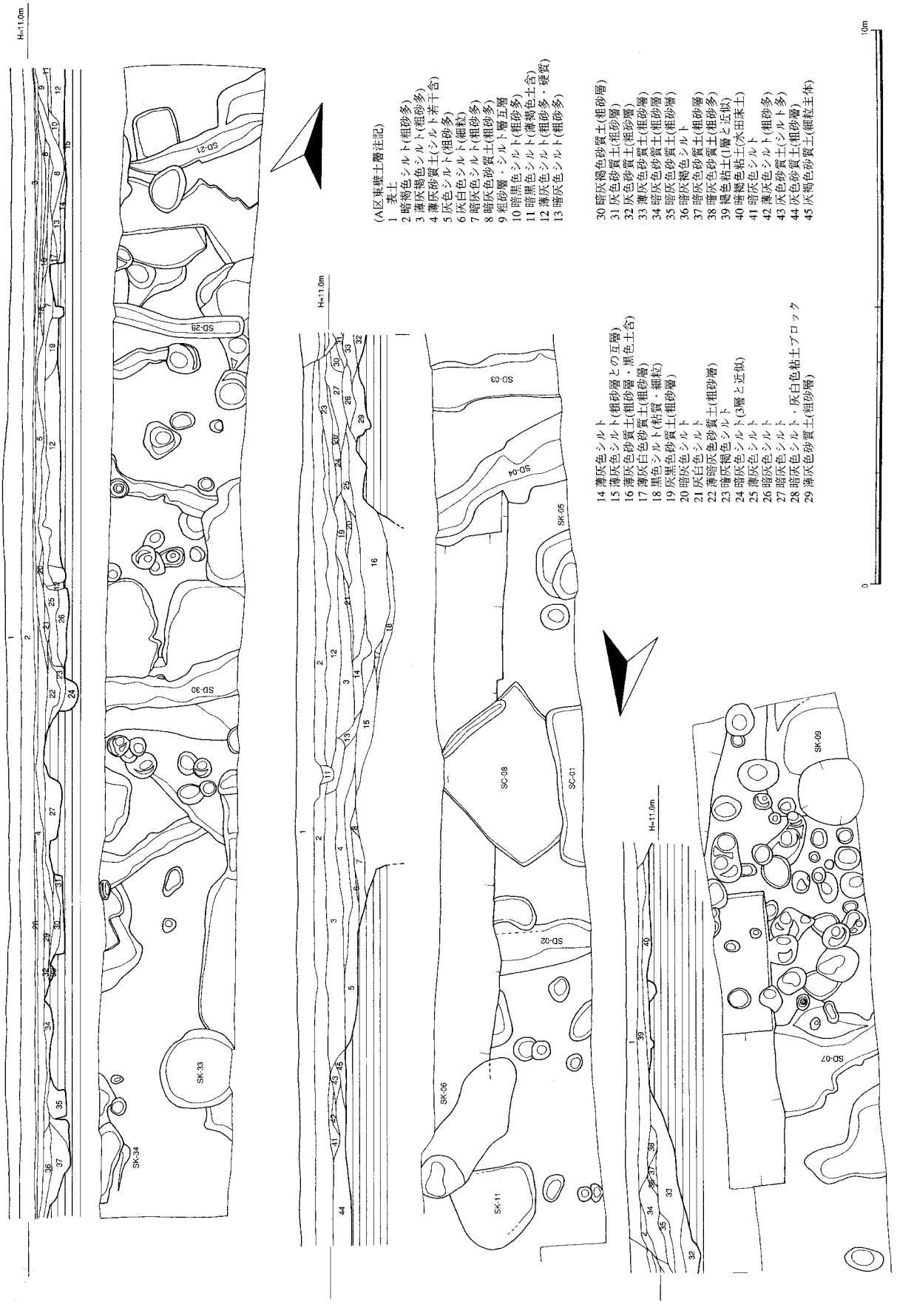


Fig.3　遺構配置図 (1/100)

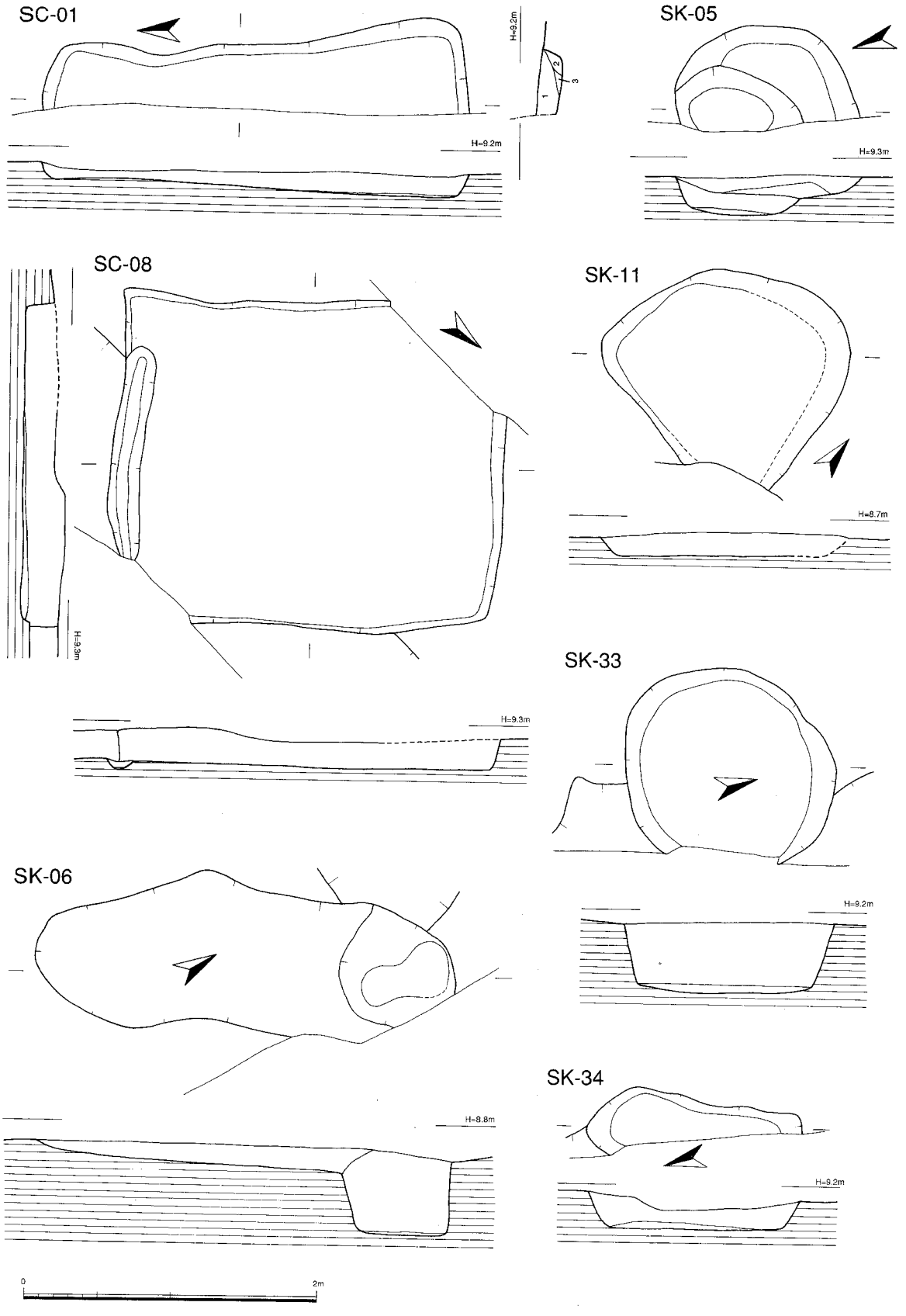


Fig.4　竪穴住居・土坑実測図（1/40）

分の深さは12cmで、大きく削平を受けていると考えられる。住居東壁がやや内側に湾曲している。検出部分で床面の平坦部分が少なく、ゆるい凹凸が目立つ。壁溝などの構造物痕跡は検出されていない。

出土遺物　遺構内からは弥生土器・土師器の小破片が出土している。弥生中期の壺形土器と同定できる破片もあるが、いずれも小片で摩滅著しく、図示できるものはない。これらの住居に伴うものではないとみられる。

出土遺物と住居形態から、古墳時代に属するものと見られる。

SC-08　A区中央部上面で検出された方形住居址。SC-01にきられる。削平が著しく、床面から24cmのみ遺存する。主軸方向は北東－南西方向に向く。平面形は整った長方形を呈し、長壁2.7m、短壁2.2mで、住居としてはやや小型である。ベッド状遺構まで削平されていると仮定すると、本来の住居面積は床面の面積から一回り大きな規模であったと考えられる。南東側の壁際に壁溝が検出されており、溝幅20cm、深さ5cmである。床面には建物に伴う柱穴痕は検出できなかった。

出土遺物　弥生土器、土師器、高杯破片が出土している。多くが小片で磨耗著しい。図化できた遺物も風化が進む。風化が比較的進んでいない破片は上層から出土している。1～4は弥生時代中期の甕形土器破片。1～3は口縁部で、外側に短い突出部を持つものである。3は口縁上面が内傾する。4は底部で、底面中央が上げ底状になる。1～4は弥生中期前半のものと見られる。これ以外の土師器等の遺物で図示可能なものはない。

出土遺物と住居形態から見て、古墳時代のものとみられる。

2)土坑

SK-05　A区中央で検出された土壙で、西側は調査区外に及ぶ。検出部分は半楕円形を呈する。内部は南側に段を持つ2段掘り状になり、北西側が一段低くなる。南北長1.2mで、検出時の深さは28m、断面形は鉢形に近い。平面形状からみて、2基の土坑が重複している可能性もある。

出土遺物　弥生中期前半の甕形土器破片と、土師器甕形土器破片が出土している。大半が小片で磨耗している。14は弥生中期甕形土器で、口縁部は外側に強く突出する。15は土師器甕形土器口縁部で、口縁部は上方に開く。

SK-06　A区北側で検出された土坑で、円形の掘り込み部分と、南西側のスロープ部分に分けられる。スロープ部分は浅い皿状になって円形部分につながる。スロープ部分は全長1.1mを測る。円形部分は井戸状に垂直に掘りこまれ、深さ60cmである。遺構下部からの湧水が著しい。

出土遺物　弥生中期甕形土器破片、土師器甕形土器破片が出土している。いずれも小片で摩滅著しく、図示可能なものはない。

SK-09　A区南端で検出された土坑で、西側、南側の調査区外に及ぶ。また、北側を撹乱で切られ、全体の形は不明である。検出部分は東西1.5m、南北1.1mの範囲で、下端形状から見て全体の平面形は長方形又は方形になるものとみられる。床面は平面で、凹凸は少ない。床面上では遺構に伴う柱穴などは検出されていない。遺構覆土は暗灰褐色粘土で、褐色粘土をブロックで含む単一層である。

出土遺物　弥生中期の壺形土器口縁部のほか、土師器、弥生土器小片が出土しているが、いずれも風化著しい。16は須恵器杯底部で、低い高台がつく。

SK-11　A区北側で検出された土坑で、南東側をSD-06に切られる。また北側は遺構覆土と地山の境界が不明瞭で、内面を確定できなかった。平面形は隅丸方形に近い不整形で、断面形は盤状になる。壁はゆるく外側に直線的に開き、床面との境界ははっきりしている。床面はほぼ水平で凸凹がない。

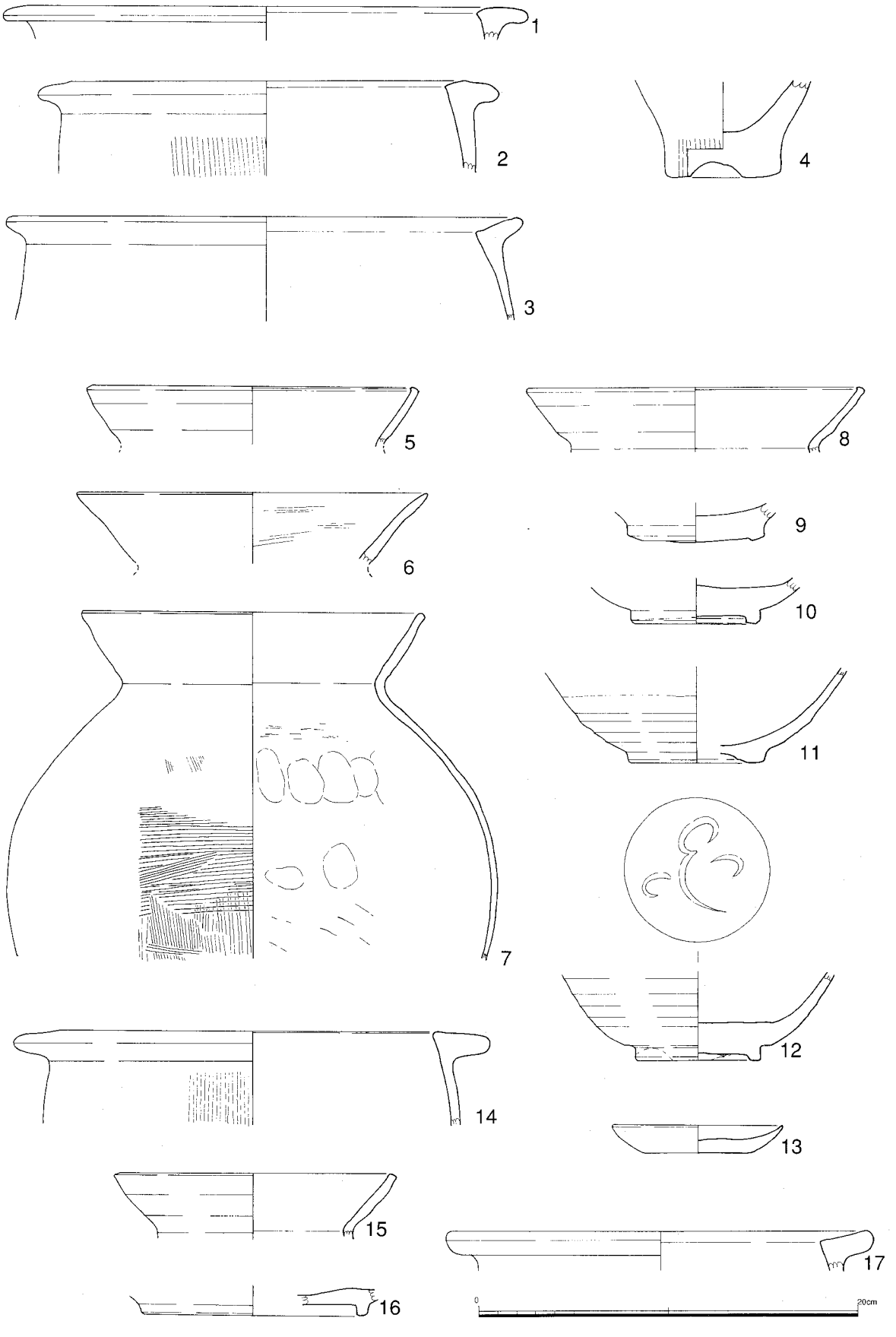


Fig.5　遺構出土遺物実測図１（1/3）

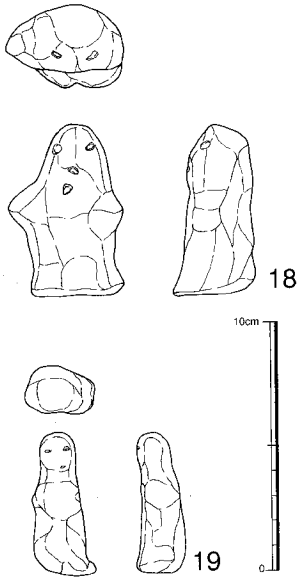


Fig.6　遺構出土遺物実測図２（1/3）

出土遺物　弥生中期甕形土器、土師器甕破片が出土している。17は弥生中期前半の甕形土器口縁部破片で、口縁部は外側に短くコ字形に突出する。口縁上面は内傾する。小片で風化が進み、器面調整など詳細は不明。

3)溝状遺構

SD-02　A区北側で検出された溝で、ほぼ東西方向にのびる。幅は80cmで一定し、検出時の深さは15cmである。遺構の断面形は半月形で上方に開き、断面の形状、深さからみて相当の削平を受けているものと見られる。

出土遺物　土師器甕、高杯が出土する。風化の度合いは比較的少ない。5は甕形土器口縁部～頸部で、わずかに内湾しながら上方に開く。口縁端部には内側への跳ね上げがみられる。外面には横ナデの明瞭な痕跡がみられる。

SD-03　A区中央で検出された溝で、東西方向に走る。幅は80cmで直線的にのび、深さは30cmで浅い。断面形は半月形で断面の形状や深さからみて相当の削平を受けているものと見られる。遺構覆土は粗砂が主体で、流れが速い状態で埋没したものとみられる。

出土遺物　弥生土器、土師器が出土している。弥生土器は小片で風化の著しいものが多い。6、7は土師器甕。6は口縁部～頸部で、わずかに外湾しながら上方に開く。7は胴部中位以上が復元でき、胴部は球形で、わずかに内湾する頸部がつく。頸部内外面は横ナデ、胴部外面は縦横方向のハケ目、胴部内面はナデとケズリで仕上げている。

SD-04　A区中央で検出された溝で、北東－南西方向にのびる。溝主軸は若干蛇行しながら走っており、北側に向かって深くなっていく。幅90mから1.0m、深さ30m。断面形は逆台形で、ある程度の削平をうけているものとみられる。

出土遺物　土師器甕、弥生中期甕形土器などが出土する。いずれも小片で磨耗進む。8は遺構下層から出土した土師器甕頸部。内側にわずかに内湾し、口縁端部には内側への返りがみられる。外面には横ナデの痕跡が明瞭に残る。

SD-07　A区南側で検出された溝とみられる遺構で、ごく浅く、造成時の段造成痕跡ともみられるが、ここでは溝としておく。南側から北に向かってゆるく落ちる斜面上に位置する。幅は0.6m～1.6m、深さは20cm、断面形は皿形で明確な立ち上がりは見られない。

出土遺物　弥生土器が小片で出土している。風化が著しく、図示可能なものはない。

3. B区の調査

(1)B区概要

B区部分は調査区南半分にあたる。A区から一段高くなり、現況では畑となっている。調査面積は52.5㎡である。

基本層序は現地表面から耕作土、暗褐色粘土、灰白色シルト層となる。暗褐色粘土中から青磁、白磁片等中世の遺物が出土しており、A区の上層に堆積している包含層とは遺物の様相が異なる。上層の堆積時期や旧地形でもかなりの差があるものと考えられ、この付近で地形の不連続線があった可能性が強い。

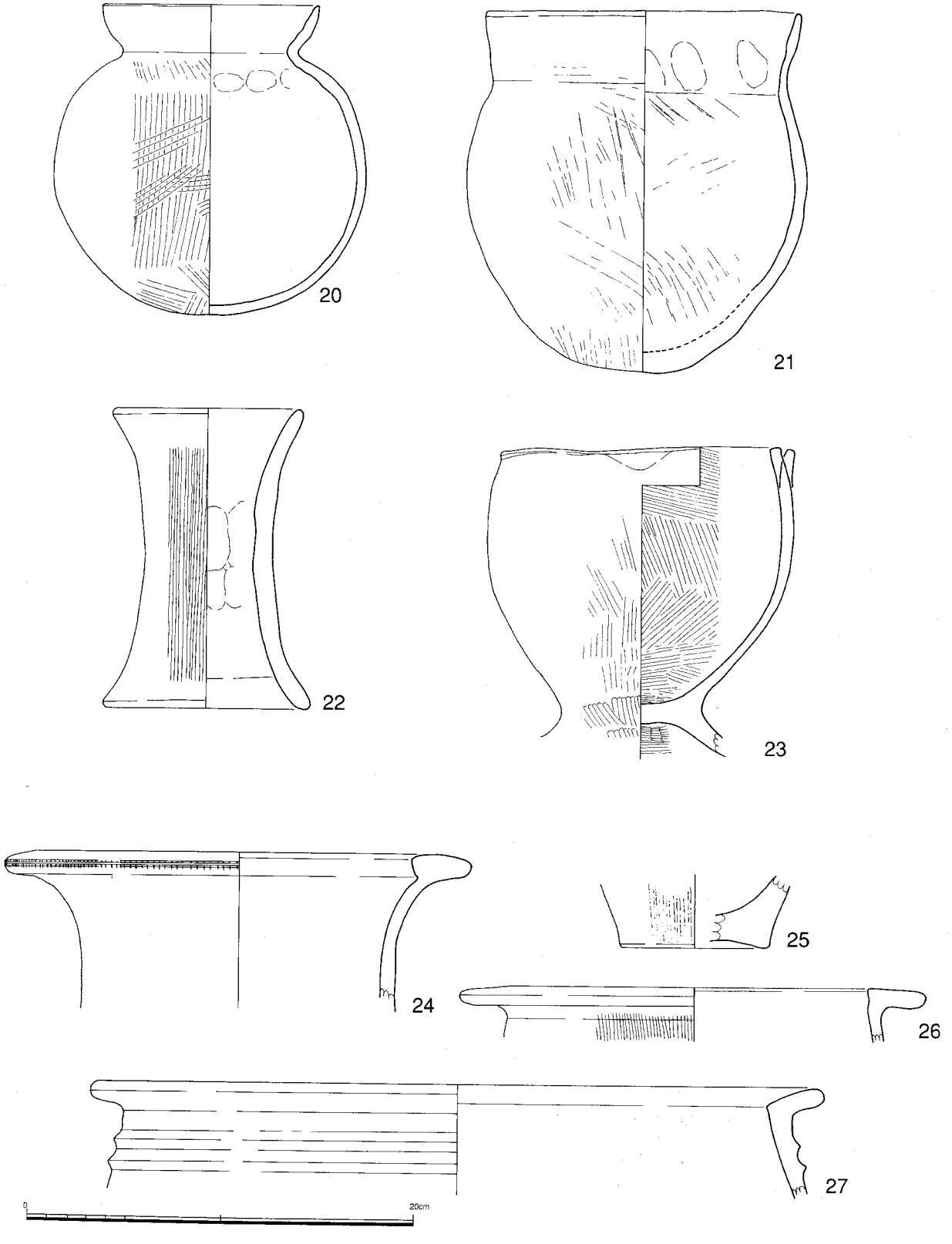


Fig.7　包含層出土遺物実測図１(1/3)

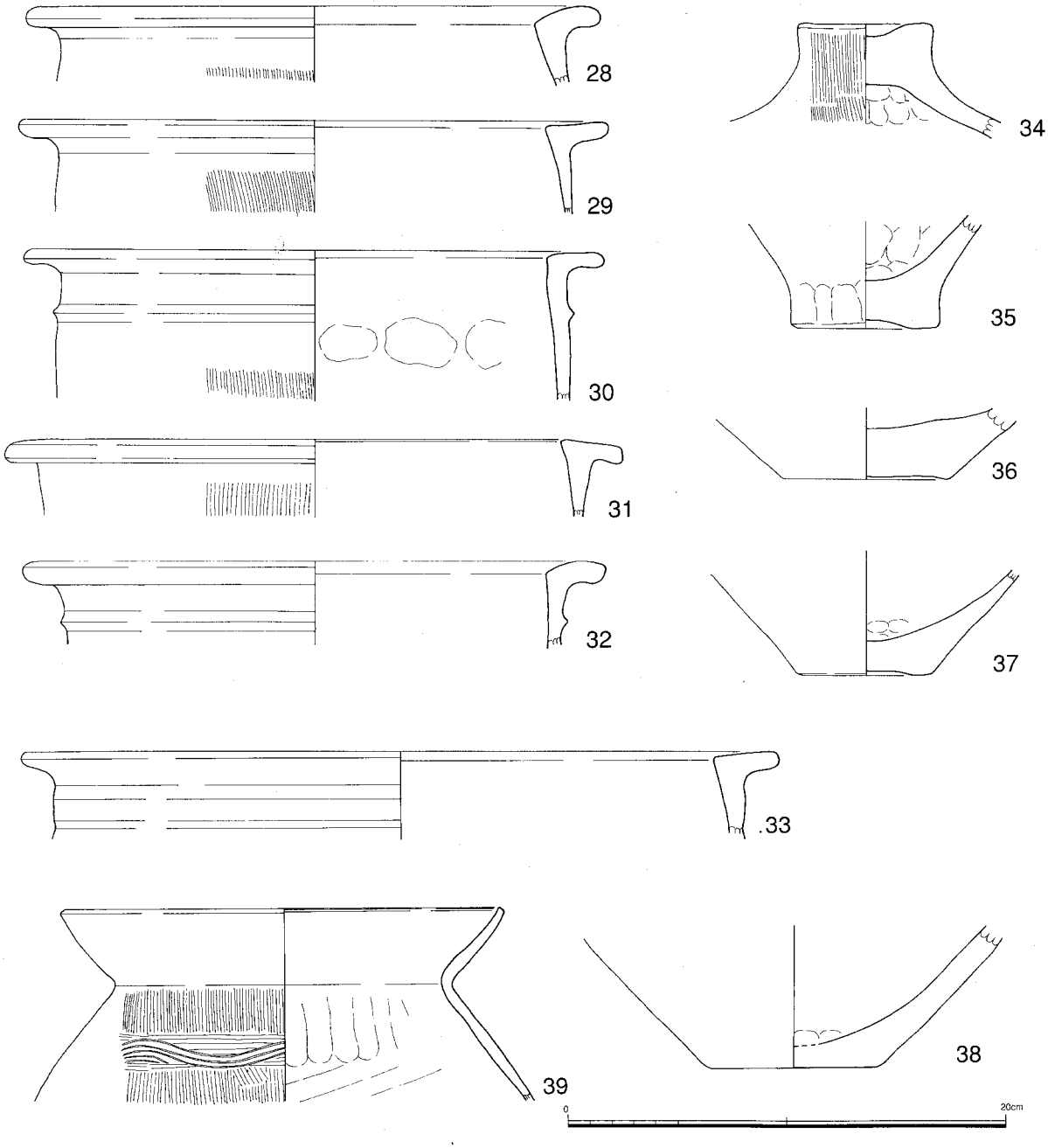


Fig.8　包含層出土遺物実測図２（1/3）

遺構は灰白色シルト層上面で検出される。この遺構面はＡ区南側で検出した遺構面と土質が連続し、一体のものと考えられる。検出された遺構面はほぼ平坦で、わずかに北側に傾斜する。検出された遺構は土坑、溝、柱穴で、遺構の密度は北側で濃く、南側ほど薄くなる。試掘結果と照合して考えると調査区南端付近が遺構の分布限界と推定される。遺構覆土は暗褐色～暗黒褐色土が主で、明瞭な遺構が多く、安定した遺構面を形成している。

遺構面の下層は灰褐色シルト層が連続して堆積し、遺物は全く含まれない。

(2)検出遺構

1)土坑

SK-33　調査区南東側で検出された円形の土坑で、東側の一部は調査区外に及ぶ。南北幅1.5m、検

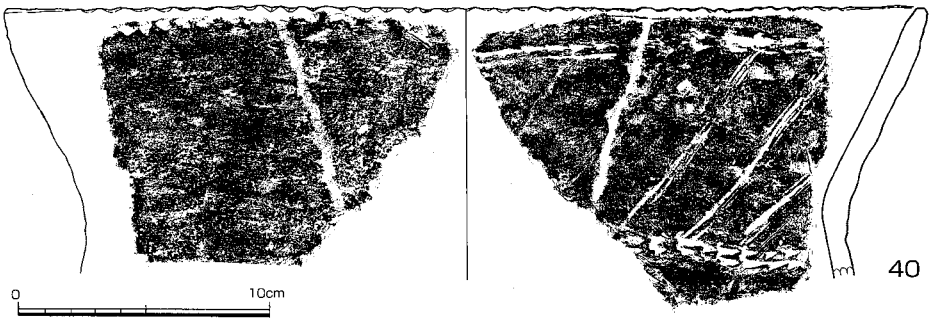


Fig.9　試掘調査出土遺物実測図(1/3)

出時の深さ40cmで、床面の南北径は1.2mを測る。断面形は台形に近く、壁はやや開き気味に立ち上がり、壁と床面との境界は明瞭である。床面は平坦で、中央部がややへこむ。

出土遺物　土製の人形が2体出土している。18は高さ6.8cm、幅4.5cm, 厚さ3.3cmの大きさで、全体に太めにつくる。目鼻口は棒状の道具で刺突しており、手はつまみ出すように整形している。脚部は若干広く面を取るが、人形自体は正立しない。19は高さ5.7cm、幅2.0cm, 厚さ1.9cmの大きさで、全体に細い。目鼻口は細い棒状の道具で突いており、胴部の整形、手足のつくりははっきりしない。底面は丸く、正立しない。

SK-34　調査区南西側で検出された土坑で、西半分は調査区外に出る。検出部分から推定すると、平面形は楕円形を呈し、断面は台形になるものとみられる。南北幅1.5m、検出時の深さ26cmを測る。遺構の東外側に段差が残るが、遺構と一連のものか不明である。壁面は直線的に外側に開いて立ち上がる。床面はほぼ平坦で壁と床面との境界は明瞭である。

出土遺物　土師小片が出土する

2)溝状遺構

SD-21　調査区北側で検出した溝状遺構で、北東～南西方向に向く。幅62mだが、調査区内での検出部分の東側で北側にテラス状に張り出す部分があり、覆土は同一で切り合いも確認できないため、一連の遺構と見られる。断面ではSD-21付近にレンズ状に堆積した層が確認されたが、この層が溝覆土になるものとみられ、本来は断面がゆるい逆三角形の溝であったと考えられる。

出土遺物　弥生土器・土師器が小片で出土する。各破片の大きさは1cm以下で、磨耗が進む。

SD-28　調査区北側で検出された溝状遺構で東西方向にのび、東端で切れる。幅36cmと細く、断面はコ字形になり、土層からも本来より細かったものと見られる。

出土遺物　弥生土器・土師器が出土している。出土した土師器は比較的大きな破片で、杯とみられる破片も確認される。

SD-30　調査区中央で検出された溝状遺構で、ほぼ東西方向にのびる。幅1.0m、検出時の深さは60cmを測る。北側にある土坑状の掘り方を切っているが、調査時には確認できず、土層で前後関係を確認している。断面は略台形で、壁、床面には凹凸が目立つ。溝覆土は粗砂を主とする層で、自然流路の可能性もある。

出土遺物　出土遺物は中世の青磁、白磁、陶器碗などを中心とする。9は青磁碗底部で、高台内面の削りが浅く、見込みの高さが高台自体の高さを超えており、不安定で正立しない。10は青磁碗底部で、高台は低く、体部下部は底部から丸く立ち上がる。11は陶器椀。高台は低く、高台内面の削りも浅く、高台自体の断面は三角形に近い。施釉部分は外面では上半部に限られ、下部は露胎。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転横ナデ後施釉。12は青磁碗。高台は低く、底部は厚く作る。内面には片切彫りで雲文が描かれる。外面は回転ヘラケズリ後施釉し、施釉部分は外面全体に及び、高台内面にも一部釉がかかる。13は土師

器皿で、直径9.0cm。口縁部は細く立ち上がり、底部は糸切りで仕上げる。

4. 包含層出土遺物

A区遺構面以下の遺物包含層は、先述したように自然流路の埋没過程で堆積したとみられる。最下層の粗砂を主とする層と、その上層のシルト層に分層して、各層出土遺物をみていく。

シルト層出土遺物　20は土師器の小型甕とみられる。口径11.0cm、器高16.0cm、胴最大径16.2cmで、胴部はほぼ球形で、頸部が短く開く。口縁端部は丸くする。胴部外面はハケ目、頸部内外面は横ナデ、胴部内面はナデ。21は土師器甕で、器面に凹凸が多く、つくりが粗い。胴部はやや縦長の楕円形で、頸部は胴部から直立する。胴部内外面は粗いケズリ、頸部内外面はナデ。22は器台。口径15.5cm、器高9.8cm、胴最小径5.6cmで、上端部、下端部ともヨコナデて丸く仕上げる。外面は縦方向のハケ目、内面はナデまたは指押さえで、絞り痕は残らない。23は土師器の台付甕で、台部分を一部欠く。甕部分は口径14.2～15.0cm、胴部は卵形に張り、胴部最大径15.7cm。口縁部は直立し、端部上面をヨコナデて平面を作っており、その際に粘土の返りが外面にはみ出す。胴部、台部とも外面は粗いハケ目、内面はハケ目が明瞭に残る。

24～27は弥生土器。24は壺形土器の頸部～口縁部破片で、口縁部は上面を肥厚させ、鋤先状口縁に近い形をとる。口縁端部は面を作り刻目を施した後にミガキ状の横方向沈線を施文する。25～27は甕形土器で、25は底部でわずかに上げ底、26は口縁部でL字口縁を持ち、27は口縁下に突帯を2条もつ。

粗砂層出土遺物　28～33は弥生甕形土器口縁部。いずれもL字形口縁で、外面はハケ目、内面はナデ調整を行うものが多い。口径は35～40cmを中心とする。30、32は口縁下に断面三角形突帯を持ち、33も破断面直下に突帯をもつとみられる。32は鉢形土器の可能性もある。34は蓋形土器。法量からみて甕棺の蓋であろう。35は甕底部。ほぼ平底で内外面はナデ、指オサエ整形。36～38は壺形土器底部で、いずれも平底で胴部へ大きく開く。以上の弥生土器はいずれも時期的に弥生中期に属すると考えられる。

39は土師器甕口縁部～胴上半で、口縁部は内側に返りを持ち、やや内湾する。胴部外面は縦方向ハケ目で、肩に波状文を施文する。

5. 試掘調査出土遺物

40は試掘調査の際にB区の南側地区で出土した縄文深鉢の上部で、頸部は外側に開き、口縁は直線的に伸びる。口縁端部上面には刻目を施す。外面は横方向の条痕文、内面はケズリ後ナデ。塞ノ神式で、縄文前期の遺物である。出土遺物全体の中で、縄文時代に属する遺物はこの個体だけである。

第4章　総括

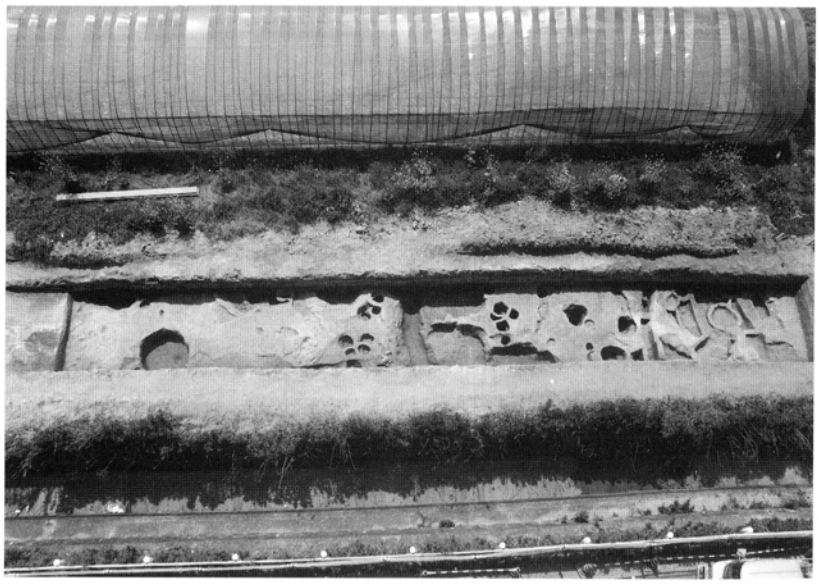
弥生時代の遺構・遺物　調査区内では遺物から明らかに弥生時代に属すると判明した遺構はないが、遺構内に弥生中期の土器の破片が多く含まれることから、調査区内又は近隣に遺構があった可能性は高いと思われる。第2次調査で弥生時代前期末～中期の墓地を確認し、第4次調査で後期の集落跡が検出されるなど、近隣で弥生時代中期から後期にかけて営まれた集落・墓地が確認されている。今回の調査で遺構内から小破片が出土し、北側の包含層から多量の弥生土器が出土したことからみて、調査区の南側の微高地に集落があり、北側の微高地端部に土器を投棄したとみることもできる。

古墳時代の遺構・遺物　古墳時代の遺物は遺構面下層の包含層及びA区遺構から主に出土している。時期的には古墳時代初頭から前半に該当するものが多く、野方久保第1次調査の土器群の時期と一部重複するものである。A区の遺構群はこの包含層が埋没した後のもので、古墳時代中頃以降と考えられる。

中世の遺構・遺物　B区SD-30で中世の溝状遺構を検出し、陶磁器を含む遺物を検出する。溝の方向、規模から見て、水田に関連するものと見られる。当地での水田経営に伴う遺構・遺物であろうが、遺物内容から見て、屋敷・集落の存在も想定できる。

図版1

1　A区全景（東から）

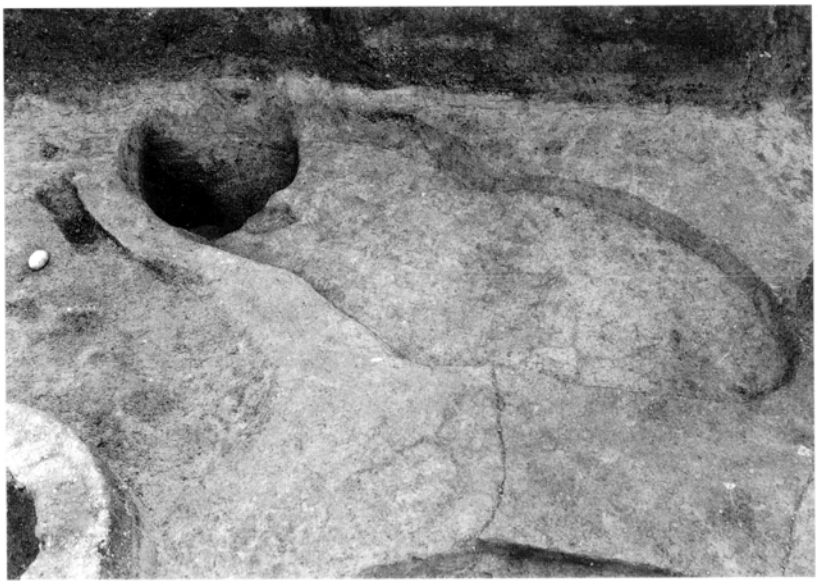


2　B区全景（東から）

3　SD－03（西から）

図版2

1　SK－05（東から）

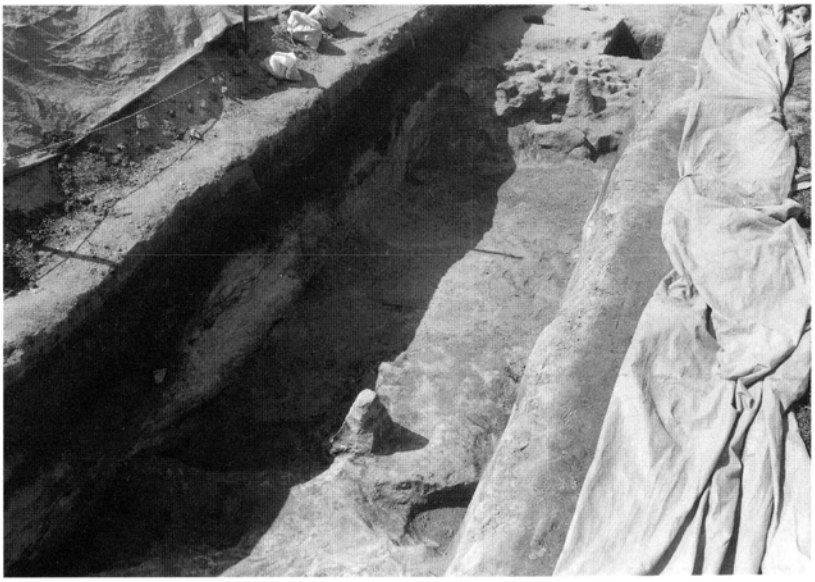


2　SK－06（東から）

3　SC－08
土器出土状況（東から）

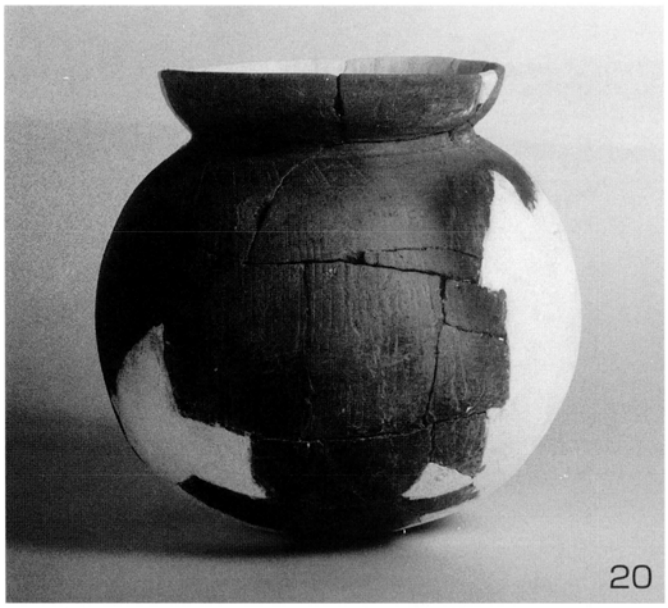
図版3

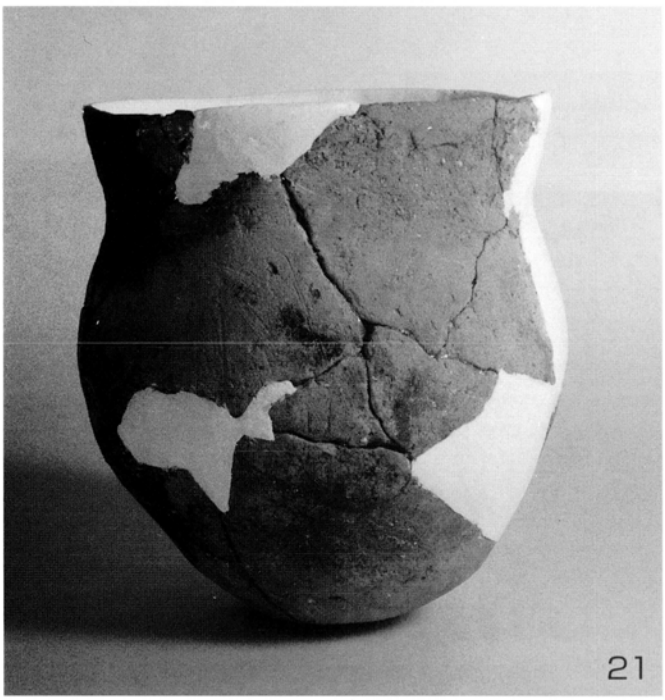
1　SD－30（東から）



2　包含層下掘下げ状況
（南から）

3　R－1002
出土状況（東から）





出土遺物

野方久保遺跡

福岡市埋蔵文化調査報告書第691集

2001（平成13）年3月30日発行

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　有限会社光文堂

福岡市博多区東比恵４丁目5番４号